

おまかせ
大 272P
「まほうの世の中」 2914P 17P
「邪悪の世」 2913P 13P
316にも数々の記事あり
2.911P
2914P 同文

日本の「大王の世紀」 3013P
16P
3174P

第四十九章 謎の世紀 五世紀

四世紀に引き続いて五世紀もまた、謎の世紀であるといわれている。

古代史の研究においては、記録・文書・木簡（文字が書かれた木札の類）・金石文（金属製の板あるいは石材などに記された文）などが必要不可欠であり、また瓦や碑・土器・布帛などに記された文字のたぐいも重要な資料となる。

日本の歴史(2) 大王の世紀 上田正昭 小学館 一六七頁参照

この五世紀の頃に文字が使われていたという確実な証拠は、無いに等しい。

しかし、今まで知られてきたように、文字を書き付けたほとんど全ての遺物が、聖徳太子の構想どおり、この世から抹殺されてしまった。

と考えてみよう。古墳時代末期

天皇陵をはじめ、朝廷のおもだった者達の

墳墓のおおかた横穴式古墳であったから、この中の品々を取り出すのは極めて容易だ

2196

ちか
連 いない 由 2909
1/310斤

2667P

2.9/2P

「古墳時代」河出書房164P

った ^{に相違ない} であらう。

また、初期形式の竪穴式古墳（^{往古の重臣}）

らの墓）なども、あえて掘り起こし、^{墓室内}

の品物、^{すべてを}取り出した後、^{天井石など}

を丁寧に復旧した^のであらうか。（「ま

ぼろ」の邦馬台国「宮崎康平、講談社、一二

三頁参照。第四十三章「装飾古墳」の項において既述）

そして後、^{文字が}記されている遺品は、^{ごとごと}

く、^{朝廷}に没収され、^{やがて、}その後

を留めないうように燃やされ、^{壊され、}あるい

は作り替えられてしまったの^だであらう、と推

察される。

*

「陸の五王」藤原全大 141 に全文あり
 能本集の刀史 26
 史料に於る日本の刀 28
 日本刀 99
 抹消 2083
 2903
 2913^P - 1/4
 2542^P - 1/2
 2542^P - 3/2
 2542^P - 3/3 写本
 遺品 小林 978
 「こころ」 2922^P

ところで、七世紀頃（聖徳太子以後）の朝廷の執物なまでの詮索の目を逃れ、あるいは辛うじて抹消されずに存続を認められ、現代にまでも伝えられ、極めて稀な遺品が数点ある。

奈良県天理市の石上神宮に所蔵されてきた「泰和四年」（三六九）の銘文を持つ七枝刀。第四十二章へ七枝刀の項において既に百済王と太子が「恩を蒙っている倭王のために七支刀を三六九年に造り、三七二年に倭国の朝廷へ献上した」と推測される。

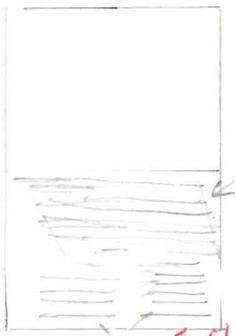
第一巻末尾の年表（三七二年）参照
 七支刀は「捨て去るに忍びず」廃棄をまぬがれ、銚漬土小舟にすんだのであろうか。

熊本県江田船山古墳出土の銘入りの大刀。第一巻の銘文は、日本における五世紀中葉頃の文字使用例とみなされ、（母真図板 500 参照）銀象嵌の銘文七五文字中の「治天下復口口

口齒大王」を、
 「治天下復之宮瑞齒大王」

と読んで、この大刀は、通常、反正天皇

2,913^p-2/4



- ・か一
- ・右側の上下は大きさは24x17掲載下さい。
- ・左側の側面には下は11。

紙と同様の色に下さい。下は11。文字

1307x11



1306
江田船山古墳出土の銘入り大刀
中心不吻合

128117
下は11。

2936^p-2/5
江田船山古墳の横刃式石棺

247

カー
左側の
鍔に、
大きく
はみ出した
揚裁
下は、

布上の
木余白を、
緑色で
埋めて
下は、

2.913P-3/4



2.913P-3/4

2936-2/5
江戸船山古墳の
杖口式石櫛

緑色
2/4

248

緑色

1309 1409

写真図版 500 江戸船山古墳出土品 (鉄剣。地)

『図説、熊本県の歴史』河出書房新社、1997年11月10日発行 口絵参照



瑞齒別天皇

（「熊本県の歴史」森田誠一、山川出版
社、二六頁。「史料」による日本の歩み
吉川弘文館、二八頁等参照）

埼玉県稻荷山古墳出土の銘入り鉄剣

金象嵌さ小た百十五字の銘文中に「雄略天皇
のこ」とあり、雄略天皇の「アサヒケ
ラフ」古代史発掘、昭和五十八年十二月一日

発行、九頁、四二頁参照

和歌山県橋本市隅田八幡神社の人物画像鏡

この鏡の縁のやや内側に四八字が鑄出され
ていて、その冒頭に「癸未年」とある。

その癸未年については、三八三年・四四三年・五〇三年・六二三年
等の諸説が提唱されているが、いまだ定説はないという。

隅田八幡鏡については、第五十八章「隅田

八幡画像鏡」の項において検討してみた。

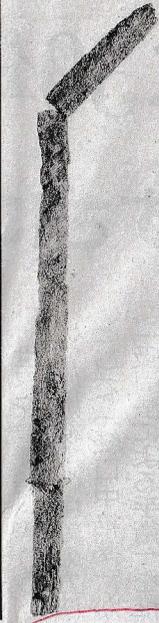
福岡市西区の元岡古墳群で、西暦五七〇年に製作されたと思われる「庚寅
の干支と「正月六日」の日付が刻まれた鉄製の大刀が出土した。（西日本新聞
平成二十三年九月二十二日付。同十月七日付参照。追って詳述）

隅田八幡画像鏡参照

きのえね

「甲子年」刀に象眼文字

熊本で出土 銘文、全国で8例目



熊本市で見つかった銘文入り鉄刀
鉄刀に記されていた銘文のCT画像。「甲子年五」と浮かび上がった。いずれも熊本市・熊本大学提供

古墳時代の横穴墓群があった熊本市中心部で出土した鉄刀に、紀元604年の象眼文字が見つかった。銘文を刻む古墳出土の剣や刀は全国で10例に満たず、古代国家の成り立ちや社会構造、地方支配の実態を解明する資料となる。

熊本市と熊本大学が27日に発表した。鉄刀は昨年、熊本城内のNHK跡地を調査した際に見つかった。

全長約55センチに覆われ、X線CTスキャンで透視すると「甲子年五」を含む6文字が浮かんだ。続く2文字は不鮮明だが「月」「中」とみられ、製作時期らしい。鉄刀の形状などから、「甲子年」は604年である可能性が高いとい

う。表面を彫って金属を埋め込む象眼技法で、材質は今後調べる。

604年は飛鳥時代が幕開けした推古朝のころ。奈良・飛鳥地方に都が置かれ、国家の確立に向けて大和政権は全国支配を進めつつあった。熊本市は中央政府から地元の有力豪族に贈られた鉄刀とみている。

象眼銘入りの刀剣は「日本書紀」などが編纂される前の日本を知る手がかり。稲荷山古墳(埼玉県)の鉄剣や江田船山古墳(熊本県)の大刀など十指に満たず、多くは国宝や重要文化財に指定されている。

出土品としては8例目で、銘文は箕谷2号墳(兵庫県)の鉄刀に似るといふ。坂上康俊・九州大学名誉教授(古代史)は「中央政権から下し渡された可能性が出てきた。冠で序列を表す有名な『冠位十二階』(603年)と同じころで、地方の中小豪族に対しては、刀を与えて序列化をはかったのではないかと話す。

(杉浦奈実、編集委員・中村俊介)

「甲子年」 刀に象眼文字

甲子年が、484年、544年、604年のどの年を指しているか、要検討。

1かた 仕方 947P
 まっほう者 2083P
 文化野
 ふりがな 1948 家後 諸家
 2.9.14
 跡切 1590P
 2911

現代に伝わりなりのものは、りわは仕方のなりこと
 ともすれば我々は
 へそんな大昔の品々が失なわれてしまつて
 記・紀が完成したとき、その存続が許
 されず下世の中から葬り去られてしまつてし
 まつたのではなからうか。(既述)
 等々において先祖代々伝えられてきたであろ
 う古代の文書・大刀・その他の膨大な伝世品は下
 記・紀が完成したとき、その存続が許
 されず下世の中から葬り去られてしまつてし
 まつたのではなからうか。(既述)
 ともすれば我々は
 へそんな大昔の品々が失なわれてしまつて
 記・紀が完成したとき、その存続が許
 されず下世の中から葬り去られてしまつてし
 まつたのではなからうか。(既述)

倭の五王
和歌集 209~216
紀(上) 626P 456P

175^{2-1/2}

2.9.17^P-2/2

なるほど、とうてい決着のつく問題ではな

しかし参考までに、古事記の年代記述と、
中国の史書の年代記述とを、あるがままに突っ
き合わせて考えてみることにしよう。

倭の五王のうち、比較の見解が一致してい
る倭王は、
「済」
「興」
「武」の三王である。

■ 通常、

「済」は、允恭天皇（何故、済と記された

かは不明）

「興」は、安康天皇（興と記されたいわく

も解さかた）

「武」は、雄略天皇（オホハツセワカタ

のタケを武と記したの

と見なされて

伝^でなり
の記述とは、
合致^あする。
記紀の記述と
宋書倭国

と仮定^かしてみると
④のようなり
合致^あせと



す系譜とを対比^{たいひ}してみると
図式化^{ずしきか}すると
①②③
のとおりに
なる。

そいて、残る「讚」と「珍」のうち、特に
問題とされるのは「讚」である。
「讚」は、仁徳天皇が履中天皇のいずれ
かであろうとする見解が広く支持されて
仁徳天皇（オホサザキ）の「サザ」をとつ
て「讚」の字があてられたのであろうと言われ
あるいは履中天皇（イサホワケ）の「サ」を
とつて「讚」と記されたのであろうと言われてい
る。
*ほかにも、飛天神皇（イササワケ）とする説も
あるが、年代的に合わないという意見が強い
。さて、記紀が示す系譜と、中国の史書が示
す系譜とを対比してみると、
のとおりになる。

かんれい 慣例 2509P の表
 ならぬ ②2916P の表
 (はた) ①②③④

條の便に下った
 上表文に
 條の尹王和歌林 210P
 順字 21075 年 宇 20
 和皇子 紀上 418P
 ②2865P に同反

2.919P
 Qは 2916P

度朝貢してきたと信じきっていたであろう。同人物「讚」か四

上表文に自ら「讚」と記名したのかも知れない。とはいえ、中国の方では、そのようなこと

中天皇(イザホワケ)は、古来の倭国の風習をまねて「讚」に従って、父の名と年とを受け継ぎ

父、仁徳天皇(讚)の第一皇子である。履(リ)として生まれ、皇位に即いた

の「讚」が「讚」であることを示しており、4は履中天皇(讚)が「讚」であることを示している。

事は、履中天皇が倭王であった時のものではな

譜のことは収まりがつかない。表の123の朝貢記

の誤りであろうと解すとき、これで一見、系

また③ 梁書に諸夷伝倭余の記事は何等か



東洋文庫 820P
 (田)2916(15) 教皇 95P
 (田)2916(16) 教皇 95P
 (田)2916(末) 合計 (田)2918(末)
 2.920P - 1/2

第2916表

そこで、4の記事は直前に

「讚死んで讚立つ」という記事もなく、任官の記述もないのであろう。

すなわち、讚・珍・沓・興・武のいわゆる倭の五王は、———実は下六人の倭王のことなのではなからうかと思われ。



このような仮説を立ててみると、先に記した口梁書に諸夷伝倭条の記述とも、(一ヶ所を除いて)ほぼ整合するよう思われる。

次のような意味に解釈してみたり。

○ 晋の安帝(三九六—四一八)の時に、倭王贊(仁徳天皇)有り。(第1表参照)

○ 贊(仁徳天皇の長子(ある)履中天皇)死し、弟彌(珍、反正天皇)立つ。

○彌 (珍、反正天皇) 死し、子 (これは弟の誤りなのだろう) ~~ある~~ 済 (允恭天皇)

皇) 立つ。
○済 (允恭天皇) 死し、子興 (安康天皇) 立つ。

○興 (安康天皇) 死し、弟武 (雄略天皇) 立つ。

□ 恐らく、こうした歴史上の推移を写し取っているのであろう。

*

井上(正)439 安康前 3年8月9日 紀上459° 紀上454°
宗(正)296 押磐死 3年10月1日 安康3年8月9日前

2,921 P 3126 凡地 紀上514°
-72 351° 349

天才 改行 紀上630° 注5

3126-2/2 30x2-1/3

市辺天皇

安康天皇崩御後、ほんの暫くの間に

履中天皇の長子日市辺押磐皇子乃(頭宗天皇

仁賢天皇の父)が皇位につりておられた

とみる説がある。(第一巻参照)均等配置

頭宗即位前紀に、「於市邊宮治天下天萬國

萬押磐尊」

播磨国風土記、志深の里糸に、「市邊天皇

命し。市邊天皇

と記されてゐるからである。(日本書紀)

(上)日本古典文学大系、岩波書店、六三〇頁、

補注十二―五参照) 大泊瀬皇子(後雄略天皇)は、詐つて

「かし、安康天皇が薨去されて二ヶ月後の早

市辺押磐皇子(市辺天皇)を近江の蚊屋野に誘い出して

射殺してし

まわした。(雄略即位前紀。頭宗即位前紀参

照)

市辺天皇の子である兄「億計王」と弟「弘

3131^P 元(2)219^P 市の妹
 3132 紀上 508^P, 638^P 市(田) 3134^P 1/2 2,922^P
 2921^P 24

#上(上) 440^P 改行
 表 清寧2年は 491年
 3127^P 3/3
 491 (清寧2年)
 -466 紀上 509^P
 25

市辺押磐皇子の妹とも、娘とも川口飯豊
 市辺天皇(市辺押磐皇子)
 あるいは、
 皇心と数えていて、一人多い。
 古事記(下)

前紀参照
 即位されることになる(顕宗即位前紀 仁賢即位)
 二人は宮中に迎えられた(その後、弟「弘計王」)
 顕宗天皇 兄「億計王」(仁賢天皇の順序で)
 清寧天皇の二年十一月
 た。(第一表参照)
 こうして、二十五年ほどの時が流れていっ
 された。
 二人の兄弟は、父が射殺された
 聞くと、恐れ小怖し、共に逃げて身を隠
 された。

米

2865^P
 -3/2
 1057

